

燈光



令和4年度灯台記念日

白洲灯台フェスティバル in 小倉城 (準備編・上)

若松海上保安部

若松海上保安部が管理する白洲灯台は来年、初点から150周年を迎えます。

また今年には私財と一命を投げ打ってその建設を始めた、岩松助左衛門(以後、岩松翁と呼びます。)の没後150年目の年となります。若松海上保安部では北九州の名士として名高い、岩松翁の功績を偲び、灯台記念日に併せて灯台の普及啓発活動のため、イベントを企画しました。

【岩松助左衛門とは】

むかし、小倉の長浜という漁師町に、岩松助左衛門という庄屋がいました。58歳のとき、助左衛門は小倉藩から、難破船を助ける役目を与えられました。白洲付近で多くの人が亡くなる事故が多いことに心を痛めていた助左衛門は、航海の安全を守る燈台をつくることを決意しました。なんとしても人々の命を守りたいという一心で、「自分の手で灯台をつくる」ことを藩

にお願いしました。工事にかかっても大変な苦勞が続きました。工事のお金が全財産だけでは足りないために、募金や借金のために走り回っているさなか、支えてくれた奥さんと長男が亡くなりました。それでも助左衛門は決してあきらめませんでした。明治の新政府が助左衛門のことを知り、国がこの工事を引き継ぐことになりました。国の役人は「あなたにはずいぶん苦勞をかけました。あなたのおかげで海の難所がなくなります。」と言って、長年の苦勞をねぎらいました。その1月後、灯台の明かりを見ることなく、69歳で亡くなりました。(北九州市より)

小倉藩沖の「白洲」と呼ばれていた岩礁地帯は、遭難が後を絶たず「西国一の魔の海」と当時の船頭たちにも恐れられていました。この海の難所から船を守るため、私財を投げ出し幾多の苦難を乗り越え灯台建設に力を尽くしたのが長浜浦(北九州市小倉北区長浜町)の庄屋だった岩松助左衛門です。助左衛門の思いは私

利私欲でなく、ただ「世のため、人のため」に尽きます。(北九州市)

写真1の左側中央付近に塀が見えるところが岩松翁の生家跡です。今年2月に取り壊され、跡地は更地となり、今年7月現在、写真2の白丸で囲われているところが生家跡であったところですが、別の建物となっています。

当時このあたりは白砂に松林が茂る風光明媚な場所だったそうです。現在、松林が見られるのはほんの数メートルを残すのみとなっています(写真4)。



写真1 長浜浦の当時
(北九州市 時と風の博物館提供)



写真2 長浜浦の今



写真3 岩松翁生家跡
(北九州市 時と風の博物館提供)



写真4 現在の長浜の松林

「イベントのきっかけ」

岩松助左衛門を称え、後世に伝える活動をしている、「岩松助左衛門翁顕彰会」(以後、顕彰会と呼びます)の皆様が毎年、小倉城内にある同翁顕彰櫓・同顕彰碑前で、岩松翁が亡くなった4月25日前後の日曜日に顕彰祭を行っています(写真5・6)。顕彰会は岩松翁が生まれ、活躍し、亡くなった長浜浦(現小倉北区長浜町)で活動しており、これまでは北九州市長や若松海上保安部長も出席して盛大なイベント(岩松助左衛門翁顕彰祭)をされておりましたが、昨今のコロナウイルス感染症の影響で規模が縮小され、子供たちの作文



写真5 過去の顕彰祭の様子1



写真6 過去の顕彰祭の様子2



写真7 過去の活動の様子1



写真8 過去の活動の様子2

の発表なども自粛され、岩松翁の記憶が薄らいでいくのではないかと危惧されていました。

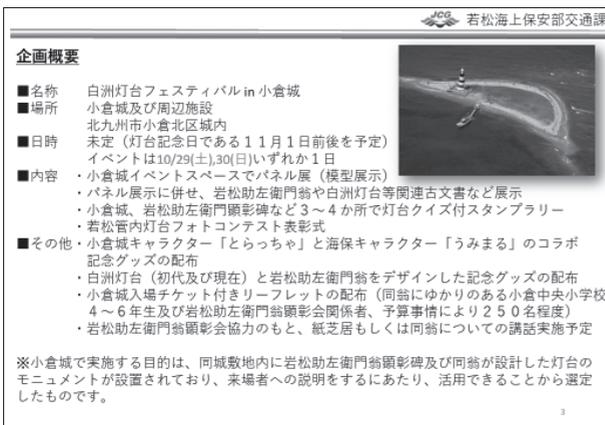
また、顕彰会の皆様は、子供たちへ語り継ぐ機会がなくなっていくことを非常に残念に思われていました。特に長浜地区の子供たちが通う、小倉中央小学校ではこれまでの活動として、4年生へ岩松翁の紙芝居を上演し（写真7）、新5年生になった子供たちが4月の顕彰祭で岩松翁についての作文を披露し、6月上旬には白洲へ渡り（写真8）、清掃活動を行うなど、様々な社会科学習をすることで岩松翁のことを誇りに思う気持ちを根付かせていたそうです。これらの活動がでない状況につき話があり、何か協力できることがな

いか、また当方としても灯台の普及啓発活動の場があればと考えていた矢先でしたので、灯台記念日を利用したイベントを企画してみました。

【実施計画】

交通課ではどんなことができるかを話し合いました。今年のイベントのトリガーは岩松翁の没後150年しかないと考え、昭和38年の5市合併（小倉市、門市、若松市、八幡市、戸畑市）により九州初の政令指定都市として北九州市になった際に、岩松翁の偉徳を偲ぶとともに水難救助のため尽くした功績を後世の市民に伝えるために設置された、岩松助左衛門顕彰

(企画書の一部)



櫓(岩松翁が計画した白洲灯台)が小倉城敷地内に設置されていることに目を付け、同櫓前には顕彰碑もあることから、ここから灯台啓発活動を実施することに決定しました。過去の顕彰祭もここで行われており、好立地と思われました。

実施に当たり、顕彰会の活動も絡めることから早速、

企画書を作成して、包括連携協定を結んだばかりの北九州市に協力を求めましたところ、快く引き受けてくれました。また顕彰会の皆様も実施について大変喜んでおられ、歓迎の意を表していただき、様々な協力を申し出てくれました。

ここからはネットクの金策に走りました。失礼を承知で様々なところへ無心をし、恥ずかしながら門前払いも受けましたが、部長の大きなバックアップもあり、何とかスカスカのイベントにならないような形とすることができそうな、金銭面での協力にもこぎつけることができました。

また北九州の多くの子供たちに岩松翁のことだけでなく、灯台のことも理解して帰ってもらえるよう、イベント内容も子供たち向けを多く取り入れました。

※イベント内容

- ・ 灯台にまつわるスタンプリナー
- ・ 岩松助左衛門翁紙芝居（顕彰会実施）
- ・ 岩松翁に関する講話（顕彰会実施）
- ・ 若松管内灯台フォトコンテスト表彰
- ・ 岩松翁関連古文書等展示及び説明会（北九州市立自然史・歴史博物館）
- ・ 灯台レンズ等の展示
- ・ 白洲及び白洲灯台模型展示

【意外な協賛】

岩松翁が生涯を過ごした長浜浦（現在の北九州市小倉北区長浜町付近）の絵を商品のパッケージに使う

いる「小菊饅頭」というお菓子が小倉銘菓となっています。このパッケージに目を付けた交通課メンバーが早速、製作している会社へ架電し、事情を説明したところ、全面協力をいただくことができました。

昭和29年創業の株式会社藤屋さんです。藤屋さんは先代ご夫妻が長浜浦ご出身であったことから、長浜の景色の絵を有名な画家さんに書いていただいたそう
で、この長浜の絵に通常は小菊饅頭の名称が入っていますが、交通課で知恵を出し合って考え付いた名称「岩松助左衛門の悲願 白洲の燈」と入れていただき、



写真9 試作品のお菓子



写真10 交通課作成のしおり

イベントのためにお菓子詰め合わせを試作してくださいました(写真9)。お菓子の中には交通課で作成したしおりを入れていただくこととしています(写真10)。

藤屋さんの副社長 藤田千恵子さんがこの度のイベント協力に関連して、顕彰会の存在に感銘を受けたうえで、自身が生まれた長浜を想い、同会へ早速、入会されたとのうれしい知らせも受けました。

「白洲の燈」は期間限定での販売ですが、ご希望の方がいらっしゃれば、1セット500円で販売されていますので、若松海上保安部交通課で商品代+送料をいただきますが、発注を受け付けています。

(令和4年11月6日まで)

ちなみに北九州市からもたくさん発注依頼を受けており、藤屋さんのお菓子がおいしいのもありますが、パッケージとしおりの効果も大きいのではと感じています。



写真11 藤屋さん前で藤田千恵子さんと当部長のショット

「展示物検討」

岩松翁生家跡が取り壊された後に生家跡に残されていた岩松家の数々の古文書等は、顕彰会の方々も1点1点確認し、北九州市立自然史・歴史博物館に所蔵されています。ところが、この博物館、愛称が「いのちのたび博物館」と言いまして、子供たちの興味がある恐竜の化石などがメインの内容となっており、岩松翁関連資料はその一角にひっそりと展示されているのみでした。北九州市や同博物館の学芸員の方々と打ち合わせた中で、これらの古文書等にも日の目を浴びせたいとのご提案もあり、イベント時に小倉城の展示スペースで一時的に関係資料を展示するという計画が持ち上がりました。スペースが限られますので、どれを展示するか、現在、打合せ中です。資料の中には岩松翁が金策に走ったものや息子の栄吉さんが全国の灯台守として転々とした辞令などもありますので、とても興味深い内容となります。

次頁の写真12は岩松翁生家前で行われた50回忌です。写真12でお分かりになるかと思いますが、多くの子供たちが参列したそうです。写真13はその日の親族写真ですが、岩松翁の孫で熊之輔さんや徳太郎さんが

写っています。

昭和初期には岩松翁の銅像を建てる予定があつたものの、時代背景により断念されたようです。設計にか
かる資料は今も残されています。



写真13

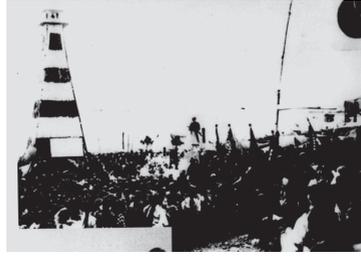


写真12

写真12、13

大正時代に行われた岩松翁50回忌法事
(岩松助左衛門翁顕彰会提供)

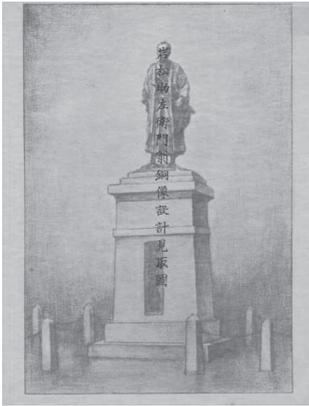


写真15 (わら半紙付)

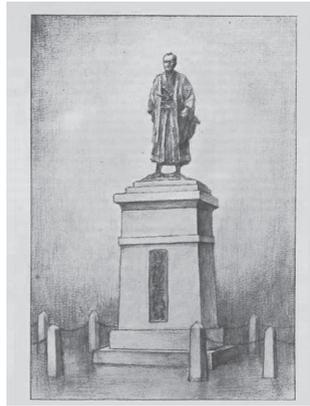


写真14

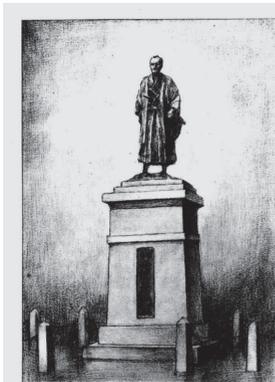


写真16

岩松助左衛門翁銅像設計及之對スル豫算明細書

| 目 | 豫算明細書 |
|--------|------------|
| 一、銅像原形 | 50,000.00 |
| 二、金鑄像 | 60,000.00 |
| 三、基壇 | 10,000.00 |
| 四、土 | 5,000.00 |
| 五、石 | 10,000.00 |
| 六、工 | 10,000.00 |
| 七、運搬費 | 5,000.00 |
| 八、その他 | 5,000.00 |
| 九、計 | 155,000.00 |

一、銅像原形 一丈五尺 上部分六尺
二、金鑄像 一丈二尺
三、基壇 十二尺四方
四、土 十六坪
五、石 十六坪 (岩松助左衛門翁墓石等)
六、工 十六坪
七、運搬費 十六坪
八、その他 十六坪

写真14、15、16

岩松翁銅像設計時の資料
(岩松助左衛門翁顕彰会提供)

また当時から昭和30年代頃まで、全国の小学校の教科書や副読本には岩松翁の偉業が掲載されていました。

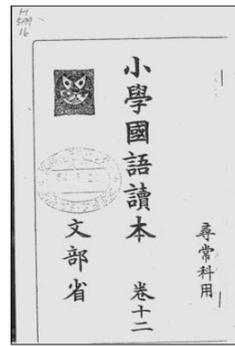


写真17

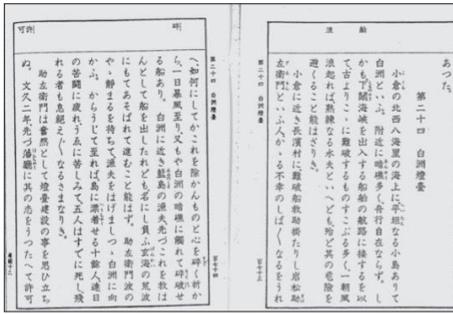


写真18

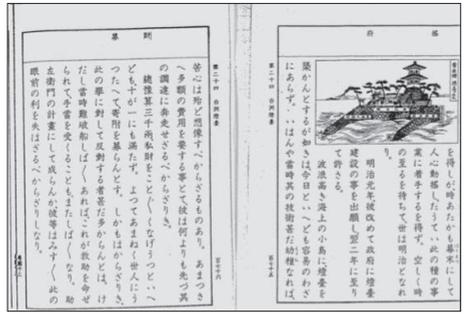


写真19

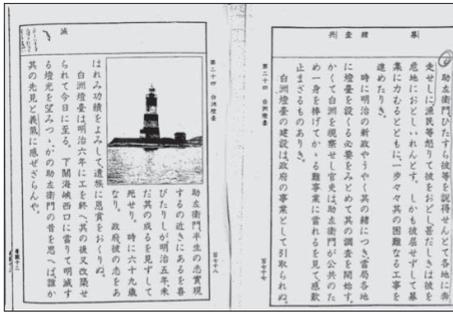


写真20

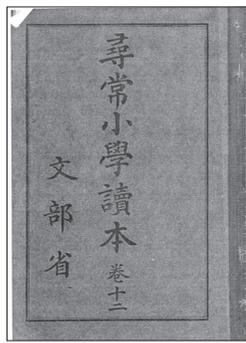


写真21

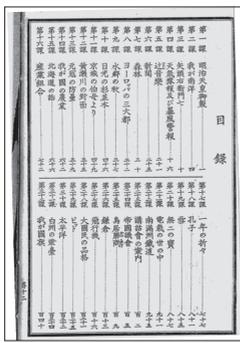


写真22

写真17~22
大正~昭和初期の国語の教科書
(岩松助左衛門翁顕彰会提供)

(三) 白州燈台
前書き

關門海峡から日本海に通じる海上に、藍島という小島がある。そこにわたしたちの学校の分校があつて、年に一度、本校の代表が、分校ほう問をすることになっている。ことしは、わたしも、参加することができた。分校には、一年生から六年生まで、合わせて十七人の生徒しかいない。先生も、ふたりだけである。わたしたちは、持っていた作文や図画、その他のおみやげの品をあげたり、お話をしたり歌を歌ったりして、島の友だちをなぐさめた。

お昼には、海をながめながら、弁当を食べた。そのあとで、島の先生から、いろいろな話をお聞きした。その話の中で特にわたしのむねを打った

15

写真24

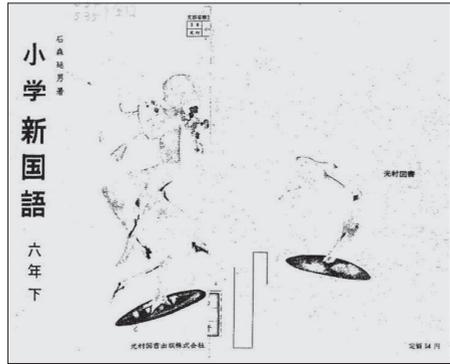


写真23

西国第一の難所とよんでいた。江戸時代の終わりころ、この町の長法という所に、岩松助左衛門という人が、住んでいた。

十八オのときから、しょう屨の役をしていたが、役めのおうえからも、白州一帯に難破船が多いことを気にかけていた。後に難破船の世話をする係になつてからは、いっそう心をいかけた。どうにかして、この難所から人々を守つてやることはできないものかと考えるようになった。暴風雨になつたり、きりに海がどざざれたりすると、かれは、海へに出て見ては、航海の安全をいのり、船の人々の無事を願つた。

あるあらしの日のことであつた。一そうの船が、晴しように乗り上げた。白州に近い藍島の漁夫たちが、これを救うために船をこき出したが、あれくるう波にさまたげられて、近づくことができなかった。

17

白州という小島がある。白州の付近には晴しが多く、むかしは、これに乗り上げて難破する船の数が、どれだけあつたか知れない。人々は、

小倉市の北西約十五キロメートルの海上に、白州の付近には晴しが多く、むかしは、これに乗り上げて難破する船の数が、どれだけあつたか知れない。人々は、

のは、千メートルほど先の海上に見えている白州燈台についての物語であつた。

わたしは、要点をできるだけメモに書き付けておいた。はっきりしないところは、あとで先生におたずねして、書き足しておいた。そのメモをたよりにお話を思い出して、それに自分の想像を加えて書いたものが、この物語である。

16

写真25

波が静まるのを待って、助左衛門は、白州へ向かった。ようやくのことで上陸してみようと、十余人の乗り組み員のうち五人は、すでに息絶えていた。

「ああ、なんという気の毒なことだ。一年間に二万さうも往來するとういうこの海が、こんなき険にさらされていてよいものか。何か、いい方策はないものだろうか。」

助左衛門は、あら波の間に見えかくれする味しように、じっと目を注いだ。

そのとき、かれの心の底には、重大な



18

決意が、頭をもたげていた。それは、ここに燈台を建てようというこゝであつた。

2

そのころ、門司のあるみさきに、小さな燈台の仮り小屋があつた。そこからは、関門海峡が、ひと目に見わたされた。この燈台は、あるおぼろさんの手で造られたもので、夜ごとにたかれるかがり火は、海をわたる人のたいせつな目じるしになつていた。

このりっぱな仕事に、助左衛門は前から感心していたが、今、この白州にも、自分の手で燈台を建てようと思つたのである。

しかし、陸からはずいぶん遠くはなれた場所であり、しかも、付近の暗しようにうめ立てて燈台を造るといふのであるから、その事業は、容易なものではなかつた。

19

写真26

助左衛門は、まず白州を中心に、付近の島々や暗しよの測量を始めた。燈台のしき地も細かに調べた。そうして、どうとう設計図を作つた。それは、今までにない大がかりなもので、暗しように石を積み、その上に高さ十二メートルほどの木造の燈台を築こうとするのであつた。

明治になって、新しい政府ができる、助左衛門は、あらためて燈台建設のこゝを願ひ出した。工事を思ひだつてから七年めのことであつた。

許可が出ると、かれは、すぐ作業に取りかかつた。最初の工事は、暗しよのうめ立てで、陸地から石や土を運び、しき地を高くする仕事であつた。工事に当たる船だけでは、どうても足りないはずがない。そこで、白州のそばを通る船に二つ三つと石を積みましてもらい、工事場まで運んでもらうことにした。

工事は、多額の資金が、必要であつた。助左衛門は、自分の財産をみ

んなこれに当てることにした。しかし、それだけでは、工事の費用の十分の一にも足りなかつた。

助左衛門は、ほうぼうにたのんで、寄付をつらなければならなくなつた。こうなると、むずかしいのは、工事だけではなくなつてくる。寄付を出しおしんだり、燈台の必要を身近に感じない人々の間には、反対の声があがり始めた。かれは、工事のひまをみては、これらの人々をたずねて、燈台のたいせつなわけを説いて回らなければならなかつた。

3

日本じゅうの燈台のことをつかさどる役所が、横濱に置かれるようになった。ある年、助左衛門は、招かれてその役所へ行き、燈台を造るこゝについて意見を求められたことがあつた。そのとき、彼の役人が、

「世界の國々は、みんな兄弟だ。どこの國の人であらうとも、人命は、た

20

21

写真27



いせつにしなければならぬ。これからは、海交通は、いっそうさかんになるだろう。その船や人の安全を図るのが、われわれの務だ」と言った。

「世界の国々は、みな兄弟である」ということばが、助左衛門のむねに強くひびいた。そのことばの中に、自分の仕事が生きているのだと思うと、十年余りの苦心をわすれて、助左衛門は、心の中に新しい希望と勇気を感じた。

助左衛門は、喜いたって工事を進めた。かれの奨をしたら、連んで工事に加わる人も、出てきた。燈台は、わずかながらも、日一日と築かれていった。が、長い年月の苦勞に、かれのからだは、すっかりつかれていた。六十九才になった助左衛門は、どうも病氣になってしまった。

ある日、身寄りの者が集まって、「この病氣を機会に、燈台から手を引いては、どうだ」と助左衛門にすすめた。

燈台を建てるために財産をつぎこんでしまった岩松家には、ほとんど何も残ってはいなかった。わずかに残った物も、その月末には、借金のために持ち去られようとしていた。そのありさまは、身寄りの者としては、見るにたえなかったことであらう。

写真28



みんなのことばに、助左衛門は、じっと目をとじたままであった。そのときである。前ふれもなく、燈台のことをつかさどっている政府の役人が、岩松家をたずねてきた。

役人は、かれのまくらもとにすわり、

「岩松さん、りっぱな仕事をしてくれて、ありがとうございます。あなたには、いっぶん長い間苦勞をかけたんですが、これからは、政府が引き受けて、

白州燈台の仕事を進めることに決まりました。喜んでください」と言った。役人のさし出す手をにぎって、助左衛門は、目をかがやかせた。

役人は、さらに、

「あなたのおかげで、西国第一の難所は、無くなるとうじています。みんなに代わってお礼を言います」と言って、頭を下げた。

その月をこして、助左衛門の死が、伝えられた。

白州燈台は、やがて、りっぱにできあがった。

あと書き

鳥の先生の話では、今の燈台は、その後改装されたものだということ。白州燈台は、全国的に見れば、その規模も、ほころに足るほどのものではないかも知れない。

しかし、まっ暗な海上に、三秒ごとについてたり消えたりしているあの光の中には、仁愛の人、助左衛門の生命がこもっていると思う。

写真29

この頃の学習のおもな目標と内容

| 日 | 月 | 年 | 日 | 月 | 年 | 日 | 月 | 年 | 日 | 月 | 年 |
|----|----|------|----|----|------|----|----|------|----|----|------|
| 1 | 11 | 1946 | 1 | 11 | 1946 | 1 | 11 | 1946 | 1 | 11 | 1946 |
| 2 | 11 | 1946 | 2 | 11 | 1946 | 2 | 11 | 1946 | 2 | 11 | 1946 |
| 3 | 11 | 1946 | 3 | 11 | 1946 | 3 | 11 | 1946 | 3 | 11 | 1946 |
| 4 | 11 | 1946 | 4 | 11 | 1946 | 4 | 11 | 1946 | 4 | 11 | 1946 |
| 5 | 11 | 1946 | 5 | 11 | 1946 | 5 | 11 | 1946 | 5 | 11 | 1946 |
| 6 | 11 | 1946 | 6 | 11 | 1946 | 6 | 11 | 1946 | 6 | 11 | 1946 |
| 7 | 11 | 1946 | 7 | 11 | 1946 | 7 | 11 | 1946 | 7 | 11 | 1946 |
| 8 | 11 | 1946 | 8 | 11 | 1946 | 8 | 11 | 1946 | 8 | 11 | 1946 |
| 9 | 11 | 1946 | 9 | 11 | 1946 | 9 | 11 | 1946 | 9 | 11 | 1946 |
| 10 | 11 | 1946 | 10 | 11 | 1946 | 10 | 11 | 1946 | 10 | 11 | 1946 |
| 11 | 11 | 1946 | 11 | 11 | 1946 | 11 | 11 | 1946 | 11 | 11 | 1946 |
| 12 | 11 | 1946 | 12 | 11 | 1946 | 12 | 11 | 1946 | 12 | 11 | 1946 |

編纂委員

編集初山 田 志

小学新国語 六年下

小学 A12123

昭和三十三年六月二十五日初版発行
昭和三十三年六月二十五日再版発行
昭和三十三年六月二十五日再版発行

定価 五十円

光村図書出版株式会社

代表 北川 武之雄

印刷所 光村図書出版株式会社

写真30

写真22~30

昭和35年の国語の教科書
(岩松助左衛門翁顕彰会提供)

この度のイベント準備に関連し、顕彰会副会長の清田禮助さんが若松海上保安部へ訪問され、岩松翁の偉業について、様々な資料を提示しながら詳しく説明してくださいました。

清田氏の説明では50回忌の親族集合写真に写っている一番小さい女の子が最近、他界されたとのことでした。

清田さんの熱意を感じ、私たちも白洲灯台への思いが深くなってきた次第でした。



写真32



写真31

写真31、32 熱く語る清田氏

「最近の白洲灯台付近」

6月中旬に顕彰会の方々数名と白洲へ渡航し、旧退息所跡地あたりに設置されている鎮魂碑及び白洲全体の清掃も併せて行いました。以前は大量に流れ着いていた外国製のゴミも少なくなり、比較的きれいな白洲となっております。顕彰会の方々は、鎮魂碑周りにハマグウの根っこが張ることにより同碑が倒壊する恐れもあるので、カットしながら丁寧に取り除いています。灯台も問題なく立派にそびえたっており、鎮魂碑の清



写真33 白洲での清掃等の様子 1



写真34 白洲での清掃等の様子 2



写真35 白洲灯台の歌斉唱

掃が終わった後、皆で白洲灯台の歌を歌って、この海域で命を落とした方々の冥福を祈りました。

「今回はここまで」

今回は準備編・下として投稿します。色々とイベントに向けて整ってきた状況をお知らせしたいと思います。

このイベントにより先人の偉業に心を寄せることで、引き続き海難防止への思いや灯台の普及啓発活動に寄与していきたいと考えています。

卒寿、尻屋埼灯台再び

普通会員 鷹見哲郎

* 卒寿を迎えての決意

2022年7月、卒寿を迎えた私はひとつの決意をした。まだ動けるうちに、私が航路標識事務所職員、いわゆる「灯台守」として最初に赴任した灯台、青森県下北半島尻屋埼灯台に行ってみよう。そして思った。ゆっくり、ゆっくりでいいから自分の足で登ってみよう、と。



写真1 尻屋埼灯台の写真パネル（仙台の百貨店で開催された灯台80周年記念式で使用）を見る度に、再訪の思いが募っていった（2022年1月、宮城県塩釜市で）

1993年3月、42年間勤務した海上保安庁を定年退職した私は、「日本全国の集約管理前の名灯台を妻と巡る」という夢をひとつひとつ実現していった。続いて2003～2004年にニュージーランド南島（『燈光』平成16年3月号）、2011～2012年にオーストラリア東海岸（『燈光』平成24年4月号）、2013年1月にユーラシア大陸最西端・ロカ岬灯台（『燈光』平成25年4月号）、同年11月には、南アフリカ共和国のアフリカ大陸最南端のアガラス灯台（『燈光』平成26年3月号）など世界の名灯台を妻と一緒に巡った。これらの訪問を通じ、私は自分と同時代に、世界の異なる場所で、厳しく美しい自然を前に、船の安全を祈り、灯を守り続けていた同志がいたという事実に深い感慨を覚えた。

その後、私は2



写真2 かつて勤務した金華山を臨む宿で、家族皆が集まって卒寿祝いをしてくれ、それが尻屋埼灯台訪問の後押しとなった（2022年7月、宮城県石巻市鮎川浜で）

度の脳梗塞、肺炎による入院を経験した。度重なる入院は私の体力を弱らせ、大好きな灯台訪問はもう無理かもしれないと思った時期もあった。しかし、週2回のリハビリに励み、畑仕事などの日常生活を通して、今ではサポートがあれば何とか行けるのではないかと思えるくらいに体力が回復した。卒寿を迎え、自分の灯台守としての歩みの「原点」となった場所をもう一度訪問してみたいという思いが募ってきた。

*現在の尻屋埼灯台

太平洋と津軽海峡が交わる本州最北東端・尻屋埼は、海上交通の要衝、豊かな漁場として重要な場所である。そして尻屋埼はこの地特有の濃霧や暗礁の故、別名「難波岬」として知られていた。この地に1876年(明治9年)10月20日、



写真3 尻屋埼灯台の銘板。明治9年10月20日に初点灯した

東北地方初の洋式灯台として、尻屋埼灯台が初点灯した。設計指導したのは、明治政府がイギリスから招聘した灯台技師リチャード・H・ブラントンである。国内最大級の「2等フレネルレンズ」は、塔高約33メートルの灯籠に設置された。レンガ造の灯台としては日本一高い灯台の塔部は、外壁と内壁が放射状のパレットでつながった二重円筒構造となっている。

尻屋埼灯台は最先端の機器・技術で海上交通の安全を支えてきたといえよう。日本初の霧鐘(当時の霧鐘は犬吠埼灯台で現在保管)や霧笛が設置され、190

1年には日本で初めて灯火を電化した灯台、すなわち「電気式灯台」としての運用も始まった。建築分野でも重要遺産として位置づけられ、「土木学会選奨土木遺産」、「近代化産業遺産」及び



写真4 戦後まもない頃の尻屋埼灯台。無線の鉄塔、宿舎、無線室、気象舎、旧海軍が使用していた木造の建物が塀の外に見える。塀の手前にはいつも記念撮影していた石もある

「登録有形文化財」に選定されている。もちろん「日本の灯台50選」の一基であることは言うまでもない。

2018年6月、海上保安庁の灯台150周年を記念し、全国で16基目、青森県内では初めての一般公開が始まった。自然公園法などの関係で、昨年1年間は参観が中止されていたが、今年の6月に参観は再開されている。現在、尻屋埼灯台における参観は季節参観（4月末から11月上旬）となっており、これまでの参観者数は28000人を超えている。

「一般公開」の始まりは、「参観灯台業務」（灯台を通し、安全で効率的な海上交通の重要性などを知ってもらうために灯台内部を案内し、灯台業務の説明をすること）が始まりとされるが、当初は灯台職員がこの業務を担ってきた。私も龍飛埼灯台、舳倉島灯台、舩



写真5 異動時の記念写真は、いつも灯台をバックにそれぞれが石に座って撮ったものだった。「定番の場所」で、孫娘のあきと写真を撮った

ヶ埼灯台などでは、よく案内をした。金華山灯台ではこんなこともあった。夕方、ずぶぬれになった1人の女性が訪ねてきた。よくよく話を聴くと、おなかに小さな命を授かったその女性は、つきあっていた男性にふられたという。絶望のあまり、身を投げようと金華山まで来て、灯台の下の岩場に立った。その時、巨大な波が突然来て、女性は頭から大波をかぶり、びっくりして我に返ったという。私たち職員は、まず風呂に入って暖まってもらってから、食事を食べさせた。一晩ゆっくり布団で休んでもらって、もう2人分の命を粗末にしないという女性の気持ちを確認してから、港まで送った。女性のその後はわからないが、かつての灯台守にはそんな出会いがいくつもあった。本州最北東端の尻屋埼灯台にも夏場には多くの参観希望者が来たが、さすがに冬の訪問客はいなかった。

*海上保安学校時代

私が尻屋埼灯台に赴任したのは、尻屋埼灯台の初点灯から77年後である。私は舞鶴に海上保安学校が移転して2年目の1953年（昭和28年）、灯台科2期生として卒業した。昭和28年3月、本庁から補佐官が学生に配属先を伝えるために舞鶴を訪問された。確か三

浦さんという方だったと思う。「諸君、これから2期生の配属先を発表する」。一管の灯台から順に読み上げていく三浦補佐官の言葉を学生たちは神妙に聞いていた。配属先は各人の有する技能、希望に従って決められた。私自身、二管の尻屋埼で自分の名前が呼ばれた時、「えらい所に決まったなあ。雪は多いのだろうか。夏はガスもかかるだろうな」との思いが頭をよぎった。実は、夏休みで実家に帰省した際に、父母には「なるべく暖かな場所の灯台を希望しているから、北はせいぜい犬吠埼あたりになるだろう。(赴任は)野島埼、犬吠埼、大王埼あたりになるかな」と話していた。

赴任を前にして帰省し、両親に「初任地は尻屋埼に決まった」と言うと、「そうか」「元来無口な父はそれ以上聞かなかつた。母は「尻屋ってどこかね?」と言った。私の故郷、岐阜県中津川市阿木は山の中だったので、両親は灯台についてあまり知識もなかつたし、何を質問していいのかよくわからなかつたかもしれない。それでも父母は私の海上保安学校入学が決まった時、とても喜んでくれた。当時、普通の農家は経済的理由もあり、子供に高等教育の機会を与えてやるのは困難な時代であった。

*二管本部へのあいさつ

昭和28年3月下旬、第二管区内の灯台に初赴任する2期生5人は、宮城県塩釜市の第二管区海上保安本部に集まった。5人の内訳は、【入道埼】加藤重雄さん*軍歴があった、【龍飛埼】小松藤吾さん*岩手出身、【鯉ヶ埼】尾野和男さん*和歌山出身、【尻屋埼】石井稔さんと私の計5人だった。当時の第二管区の本部長は菅谷さんだった。その時のことは緊張していたせいで、あまり思い出せないが、「ご苦労さん」と声かけをしてもらったことは今でも覚えている。二管本部では「(赴任地が僻地のため)しばらくは街に行く機会などないだろう」と塩釜港から松島湾を巡る遊覧船に乗せてもらい、松島で鰻重をご馳走になった(私も二管本部勤務時に、ほとんど海を見たことがない両親を呼んで松島を案内したが、今から思えばいい親孝行になったと思う)。

我々は、その日の夜、塩釜駅から夜行列車に乗って赴任地に向かった。当時は寝台車ではなかつたので道中、「同期」の皆でいろいろ語り合つて夜長を過ごした。加藤さん、尾野さんは盛岡駅で列車を降り、一足先にそれぞれの赴任地に向かつていった。残つたのは3人。

夜行汽車が東北本線の野辺地駅に着くと、私たちは龍飛崎に向かう小松さんと別れ、大湊線經由で下北半島の田名部駅へと向かった。

田名部駅に着くと、私たちは小さな神社のそばにあった旅館に投宿した(今回の旅では、むつ市内のホテルに泊まり、その途中、田名部駅の跡地にも行ってみたがかつての面影は全くなかった)。翌日、鍋釜食器類などの生活雑貨を調達し、駅前の運送屋「金沢」で、馬そりに布団、衣類などが入った行李を積みこんだ。田名部駅から尻屋埼までは約28キロ。パソコンで検索してみると徒歩では約6時間かかるようだ。昭和28年の初春、当時は除雪もしていなかったから、私たちは2〜3メートルの雪の壁の間を進む馬そりの後を、貸与されたばかりの長靴を履いて歩いていった。途中の休憩時に「金沢」の馬方が「おい、疲れたか」とリンゴをぼいとわけてくれた。郵便局のある岩屋の「入口」に着くと、風が強いためか、道の両側の雪がなくなっていた。我々は荷物を馬そりから荷車にませ替えた。荷車が灯台の入り口に着くと、先輩職員が迎えにきてくれた。

* 初任地、尻屋埼灯台での生活

こうして初任地・尻屋埼での私の勤務が始まった。

同期の石井稔さんは私の4才年上で、飛行機の操縦訓練経験もあり、戦後は国鉄の機関助手などの仕事をしていた。石井さんは優秀な方だったので、尻屋埼勤務中に第1級通信士、第1級無線技術士の資格もとられた。また当時、田名部の学校を出て尻屋埼の小中学校の先生をしてもらった奥さんと出会い、長く尻屋埼で勤務された。その後、呉の大学校での研修で一緒になつた時、私は石井さんと再会を喜んだ。

当時、生活に必要な物は1週間毎に田名部から取り寄せた。缶詰(いわし、サンマ、カニ)、マヨネーズなど調味料や、野菜に関しては、冬にキャベツ10個、白菜10個などまとめ買いをして、それぞれ押し入れなどに保存していた。宿舎は、鉄筋コンクリート建てで、6畳、4畳半、2畳の3部屋があった。風呂は共同で五右衛門風呂だった。当時は屋根から集めていた天水に頼らざるを得ないほど、水は貴重だった。その頃尻屋崎には灯台職員が12、3家族住んでいた。いわば、灯台はひとつの集落、コミュニティーでもあった。給料は職員の代表2人が岩屋の郵便局にとりにいき、代

表を通じて貯金もできた。敷地内には郵便ポストもあり、郵便配達員も自転車で毎日来ていた。配達員さんは、灯台長が採用していた「小使いさん」の家（海軍が戦時中使用していた木造の「見張り所」で弁当を食べ、休憩していった。「小使いさん」は、飲み水を運んだり、まきを作ったり、6〜8キロメートル先の「岩屋」まで買い物頼まれたりしていた。

年に1回、灯台補給船が来航すると、灯台周辺の集落は活気づいた。4、5月頃になると、津軽海峡側の海岸近くに補給船が停泊し、大量の暖房用の石炭、エンジン用の油（当時エンジンは灯台用に2台、霧信号用に2台、無線用に3台の計7台有り、大量の油が必



写真6 灯台補給船が荷揚げした海岸はそのままだった。集落の人たちが総出で燃料などの物資をリヤカーに載せ、灯台まで運んでくれた

要だった）を次々と下ろしていった。尻屋集落の人たちがリヤカーを数十台連ねて、総出で運んでくれた。尻屋崎で思い出といえ、アワビである。今と違っておらかな時代だった。灯台下の「平磯」と呼ばれる場所は、当時、灯台職員が食べる分のアワビはとつていとされていた（霧がかかって少し越境した人もたまにはいたようだが）。小ぶりのエゾアワビはゆでて干して半生で食べた。干し魚作りは盛んで、タコなどは乾燥させて実家に送ったりもした。非番時の魚釣り（ソイ、メバルなどが釣れた）は息抜きになった。

サクラマスの刺し身は送別会の定番だった。テレビもラジオもない生活だったので、無線室の親ラジオとつながっている各部屋のスピーカーから流れる番組はちよつとした楽しみでもあつ



写真7 灯台下にある「平磯」。潮が変わる度に、同じ場所にアワビはくっついていてた。アワビは当時の私たちの日々の食料事情を支えてくれた

た。野鳥の渡りの季節になると多くの鳥が灯台にぶつかっていた。私はそんなこともあって、野鳥に興味を持つようになり、後日、日本野鳥の会へ入会するに至った。

*当時の灯台守の仕事

現在の灯台は全て自動化されたが、当時の尻屋埼灯台では、全てにおいて灯台職員が関わっていた。灯を守る他に、3つの大きな仕事があった。一つは無線(410KCによる方向探知、500KCの常時聴取*4時間ずつの交代)、二つ目に気象観測。9時、15時、21時の定時に地元測候所に電報を打った。台風接近時は3時間毎に電報を打った。そして三つ目が霧信号だ。天候の安定する秋には霧信号業務はほとんどなかったもの、冬の吹雪時や6、7月は頻繁に視程が1000メートル以下になり、当番が回ってきた。霧笛室に入ってエンジンを通し、空気を圧縮して20〜30秒に1回、視界が回復するまで、時には夜を徹して、霧笛を鳴らし続けたのは忘れられない思い出だ。

また当時の尻屋埼においては、安定した電力を全て自分たちでまかなわねばならなかったので、7台のエンジン保守も大切な仕事だった。その他に記憶の残っ

ている仕事としては、「分銅巻き」もあった。私の赴任中に「機械巻き」となったが、私が赴任した当初は、分銅が落下する力を使ってレンズを回転させていた。当直が終わる頃、灯台の上に登って分銅を巻き上げたが、なかなかきつい仕事だった。鉛の分銅は200キログラム以上あったと思う。業務外でも、冬用の個人の暖房につかうまき集めも大切な仕事だった。宿舎では、だるま型まきストーブを使っていた。職員は海岸に出て、難破船の残骸をよく拾ってきては、まきをせつせと作っていた。

*2022年再び、尻屋埼灯台へ

今年の東北は雨の多い夏だった。私たちは新型コロナウイルス対策を万全にし、塩釜を車で出発した。時を置かずして大雨が降り出した。途中の岩手県内もずっと雨だった。ところが尻屋埼に近づくにつれ、雨はやみ、晴れ間がのぞいてきた。かつて灯台補給船が物資を荷揚げした浜を見渡す場所に到着した頃には、空はすっかり晴れ上がっていた。気温、湿度も高くなり、風も弱く、海には白波もたっていない。絶好の「灯台日和」である。長距離を車で移動してきたため、当初は初日は外観だけにして、翌日に登ろうと思っていた。



写真8 文字盤が取り外された日時計が、かつて無線室があった一角にあった



写真9 一呼吸つき、上を見上げると昔と変わらぬ美しいらせん階段があった。階段の内側には内装材が貼られてきれいになっていた



写真10 分銅を確認する扉はそのまま残っていた。天井には分銅巻きに使った装置も残されていた

しかし、気象条件が頻繁に変わる状況を考慮して、条件がそろっている「今」登ることを決断した。

車から降りると、私の目の前に、青空にむかってすくくと立つ白亜の尻屋埼灯台があった。ブランドンの設計した、何度見ても美しい灯台だ。「あれは何？これは何？」と興味深いいろいろ聞いてくる孫娘に丁寧に説明しながら、私は新しい門からゆっくりと灯台敷地内に入っていた。昔の面影を残すものは日時計くらいしかなかったが、目を閉じると私の脳裏に、かつて宿舎があった場所、共同浴場があった場所、気象観測舎があった場所など、かつての灯台コミュニティが次々とよみがえってきた。灯台まで登る階段は当時

のまま3つあり、私は手すりのついた左側の急な階段を上っていた。

真新しい燈光会の尻屋埼支所で参観寄付金を人数分納め、いよいよ128段の階段を上り始めることにした。かつては何

とも思わなかった階段だが、今の私は杖をつきながら、途中休みつつ、一段、一段ゆっくりゆっくり上っていた。孫娘が優しく先導してくれ、息子が後ろで支えてくれた。上を見上げれば石造りのらせん階段が、昔



写真11 階段に書かれている数字。残り何段という目安になってくれた

と変わらず美しい模様を描いている。カーテンの開閉や分銅巻きのためかつて何度となく往復した階段の内側には内装材が施され、階段途中には現在位置の表示



写真12 私を迎えてくれた「2等フレネルレンズ」。懐かしさがこみ上げた。分銅巻きで回っていたレンズは、現在、改良された自動装置で回っていた

もされてある。灯台の一般公開を通し、純粹に灯台を好きになってくれる人が増え、今も船舶の安全を静かに見守る灯台への理解が深まってくれたらうれしいことだ、などと考えているうちに外光が見えてきた。

最後の急な階段を上りきると塔室に出た。私が若かりし頃、何度も何度も磨いたあの「2等フレネルレンズ」が私を迎えてくれた。「久しぶりだね。よくきてくれた。あなたも90歳になりましたか。私は146歳、まだまだ現役です。これからお互い元気でいきましょう」と声をかけられているような感じがした。

回廊に出た。涼しい風が吹き抜ける。座って水分を補給し、十分な休憩時間をとった。夏の日差しの下で見る海は美しかった。南南東の風1メートル、波はほとんどない。こんなにも



写真13 海を見ながら、灯台の回廊を孫娘と語り合いながら、ゆっくりゆっくり回った

ゆったりと海をみつめる余裕は現役時代にはなかったかもしれない。「じつち、灯台来れてよかったね」孫娘が言った。大腿骨折手術後のリハビリのため塩釜で留守番をしている妻にはビデオ電話で報告し、今も一緒に歩んでくれていることへの感謝の気持ちを伝え

た。私はこれまで歩んできた灯台守としての誇りを胸に、子どもたち、孫やひ孫たち、とりわけ主計士を屈指し、今秋から私の母校・海上保安学校で学ぶ孫娘・あきに大きなエールを送った。



写真15 灯台をモチーフにしたトイレ



写真14 かつて私の住んでいた宿舎跡に立った。当時の宿舎は戦災で焼け残った唯一の鉄筋コンクリートの平屋の建物だった



写真16 東通村立尻屋小学校（現在閉校）は灯台をモチーフにした美しい木造校舎。当時の尻屋埼集落の小学校では時々映画の上映会が行われ、灯台の若い職員は当直者を残して見に行った。「七人の侍」などが今も印象に残っている。



写真17 今回、天候に恵まれたので、私が滞在勤務をしたことのある2灯台、龍飛埼灯台（初点灯は私の生まれた昭和7年7月）、平館灯台も訪れた。平館灯台のまわりはきれいに整備され、当時使っていたダイヤホン（筆者後方）や、初代灯台の基礎も残っていた

明治の灯台の話 (71) -

清水灯台 (前編)

灯台 研究生

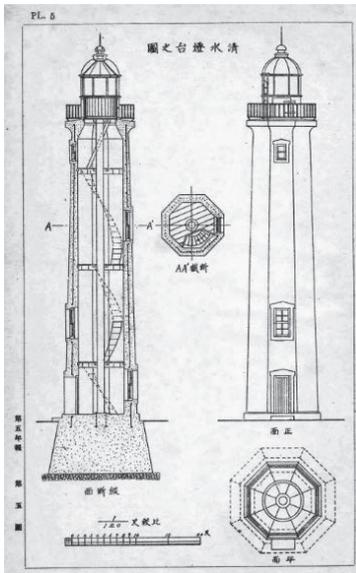
鉄筋コンクリート造灯台の誕生秘話

明治の最後の年となる明治45 (1912) 年には、3基の灯台が誕生しています。前回の特牛灯台、前々の蓋井島灯台、そして今回の清水灯台です。3基の灯台の図と概要は、大正5年11月刊行の航路標識管理所第五年報 (以下、第五年報) に掲載されています。清水灯台については次のとおりです。

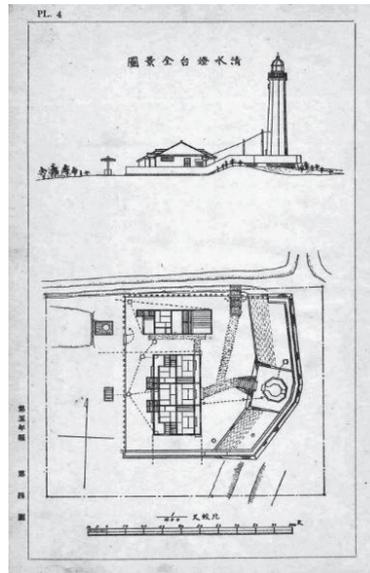
設計ノ概要

敷地約二百十坪ヲ二段トシ 燈臺敷地ハ水面上十六尺 (約4・8m) ノ高サニ埋築シ 退息所及物置所ヲ低地ニ設ク 構圍ハ煉石塀及木柵ヲ繞ラシ 表門ハ公道ニ面シテ設ケ 井戸ハ構外ニ掘鑿シ家形ヲ設ク (資料1参照)

燈臺ハ 混凝土造八角形白色ニシテ 基礎ヨリ燈火

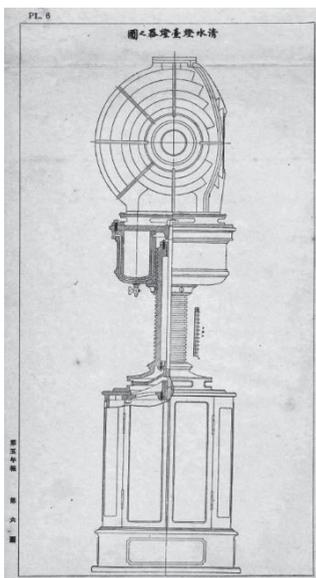


資料-2 清水灯台之図 (第五年報付図)



資料-1 清水灯台全景図 (第五年報付図)

二至ル高サ五十一尺六寸 (約15・6m) 塔ノ基礎ハ八角形トシ 地中へ八尺 (約2・4m) 混凝土ヲ充積シ 側壁ハ鐵筋混凝土造 塔内中央二回轉機械 重錘垂

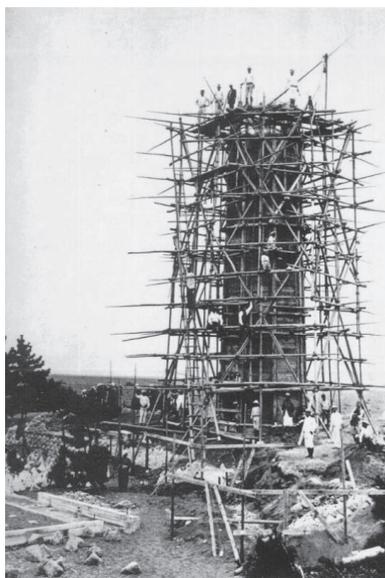


資料—3 清水灯台灯器図
(第五年報付図)

下鐵圓筒ヲ建テ 四階ニ画シ 各階ニ鐵製廻旋梯子ヲ架シ 窓及入口ニ木枠ヲ嵌メ 硝子戸及板戸ヲ建付ク塔側壁上ニ鑄鐵製胴壁ヲ据付ク 之レヲ燈室トス 而シテ該壁上ニ鐵製燈籠ヲ冠シ 燈光發射面ハ厚玻璃板ヲ以テ張覆フ 又該壁周圍ニ外縁ヲ設ケ 鐵手欄ヲ繞ラス(資料2参照)

燈器ハ 第六等白色ニ連閃光折射玻璃ヲ 水銀槽臺上ニ装置シ 太陽燈式石油「マントル」火口ヲ用ヒ回轉機械ニ依リ連閃燈ヲ發射ス(資料3参照)

吏員退息所並物置所共 木造ニシテ 家根葺及外側共 亜鉛引波形鐵板張りトシ 室内ヲ事務室及二住居ニ 物置所ハ内部ヲ小使室及浴室並ニ物置ニ區画ス



写真—1 建設中の清水灯台
(ふるさとの思い出写真集清水より)

本工事ハ明治四十四年五月二十七日起工 四十五年二月二十五日竣工 同年三月一日ヨリ點火セリ

清水灯台は、日本初の鉄筋コンクリート造の灯台でした。最新の工法が採用された灯台でしたが、退息所と倉庫は、他のコンクリート造灯台と同じ木造のままでした。また意外なことに、第五年報に掲載の清水灯台以降の4基のコンクリート造灯台は、鉄筋コンクリート造をどこも採用していません。

灯台の設置理由についても、第五年報に見られますが、そこには記されていない知られざる事実が地元に残されていました。大正6年に清水町役場が発行した

清水町沿革史に、清水灯台が設置されるまでの詳細な経緯が次のとおり記されています。

清水燈臺ノ設置ニ就テハ、其沿革頗ル記スベキモノアリ、初メ燈臺ノ設置ヲ必要トシテ、之ガ官設ヲ望ムヤ、乃チ我清水町トシテ、其運動尤モ努メタルモノアリ、明治四十一年中、町長及有志者ハ、逋信省管船局ニ出頭シテ、屢其設置ノ必要ヲ陳述シテ、請願セシモ、容易ニ許可セラルベクモアラズ、其理由ニ曰ク、今全国中燈臺ノ必要トスルモノ現時六百餘ヶ所、是皆嶮岨或ハ暗礁アリ、一朝風波アランカ、危險最モ恐ルベキ場所ノミ、清水港ノ如キ安全ナル港湾ニ建設ノ餘地ヲ存セズ云々ト、然ルニ我清水港ハ近時、日二月ニ内外船舶ノ出入頻繁ニシテ、皆時間ヲ期シテ貨物ノ積卸ヲナス、闇夜又ハ風雨ノ際ハ、三保崎ヲ懸念シテ往々出入ニ迂回ヲナス為ニ時間ヲ失スルノ損害少シトセズ、又数千ノ漁船風波雨夜等避難ノ為ニハ、是非トモ燈臺ノ設置ヲ必要トスルヲ以テ、此上ハ町経営ヲ以テ設置セント、之ヲ町會ノ決議ニ取り、乃チ政府ニ於テ設計ヲ與ヘラレンコトヲ請願シタルニ聞届ケラレ、明治四十三年、横濱航路標識監督署ヨリ、**技手田中頼一氏ヲ派遣セラレ**、総額金一万三千圓ノ設計成ル、此

設計ニ因リ本縣知事李家氏ニ迫リ、之ニ対シ八千圓縣補助案ヲ縣會ヘ提出アランコトヲ請求シタリ、既ニシテ知事ハ五千圓ノ補助案ヲ提出セラレタリ、然ルニ本縣會ハ之ヲ否決シタリ、於是土屋町長ハ再ヒ、其筋ニ請願スルノ意思ヲ起シ、町有志者ト相謀リテ、直ニ上京シ、又々管船局ニ出頭シテ、局長ニ面會シテ、是迄ノ経過ト設置必要ノ理由ヲ具陳シテ、熱誠ヲ披瀝シ以テ同情的ニ詮議アランコトヲ請フ、是ニ至リテ其筋ノ詮議初テ熱シ、漸ク許可ヲ見ルニ至ル、明治四十五年二月燈竿ト同ジク落成ノ式ヲ挙ゲ、本町ノ希望ハ茲ニ貫徹シテ、以テ今日ノ設置ヲ見ルニ至ル

清水港は明治32年に開港場に指定され、以降外国船の出入りが頻繁になり、37年からはミカン、39年から静岡茶の輸出が開始されます。特にお茶の輸出は明治42年には横浜港を上回る522万1667円を記録し、全国一のお茶の輸出港となります。43年度の貿易額は一千万円を超え、同年11月に清水港で盛大な祝賀会が開催されています。正にこの時期に、清水町長と有志者らが、県や国に対し灯台の設置要望を何度も粘り強く繰り返し、その熱意により清水灯台が誕生していったのです。

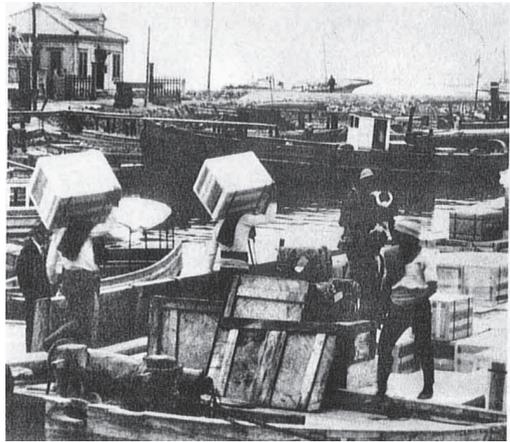


写真-2 静岡茶の積出しで賑わう清水波止場
(清水港開港100年史より)

この灯台の設計者は、航路標識管理所の田中頼一技手と明記されています。田中技手については、拙稿61「屋形石灯標」と67「屋島灯台」の中で、コンクリート造を手掛けた技手として既に紹介済みです。清水灯台誕生の3年前の屋島灯台建設時の田中技手を回顧した記事を再掲します。

当時燈臺予定地の測量や建築に関する事項は、工務課新営掛(係)の分掌に属し、掛長には長く田中頼一技手(写

真3)が据わり、殆ど獨りで切廻された。田中氏は竹田工務課長の信頼篤く、態度堂々として人柄好く風采上り、しかも常に身装をくずさず、貫録を示してゐた。初め書記の出で内務省の土木局邊りに勤め、管理所に轉じてしばらくして後に技手名義になつた人である。相当に筆もたち予算要求の理由書など定評あり、當時氣むづかし家の町田主計掛長(後の會計課長)とは好いコンビであった。要するに、書記で敲き上げた技術者は総てに便利で、鬼に金棒と謂ふべきである。自然氏が新営工事を思ふが儘に掌理し得たのも、故ある哉である。

屋島の燈臺に就ても、位置の測量、燈臺建築の事は、一切田中氏に依つて計画され且実施された。



写真-3 清水灯台設計者
田中頼一
(燈光会蔵 大正3年伝習生
卒業記念写真より)

明治42年6月現在の逓信省職員録を見ると、田中技手は確かに航路標識管理所の工務課新営掛長と記されています。同職員録に掲載の当時の分掌規定には、新営掛の所掌事務が次のとおり記されています。

第三条 工務課新営掛ハ左ノ事務ヲ処理ス

一 新営工費ノ予算概算書及要求書ノ取調ニ関スル事

二 新営工事ノ設計ヲナス事

三 新営工事ヲ調理スル事

四 航路標識位置ノ測量ニ関スル事

五 新営工事ノ経費ヲ掌理スル事

清水灯台を設計したと見られる田中頼一技手も出席した清水灯台落成式の様子が、明治45年5月27日付の燈台公報第四百十号に次のとおり掲載されています。

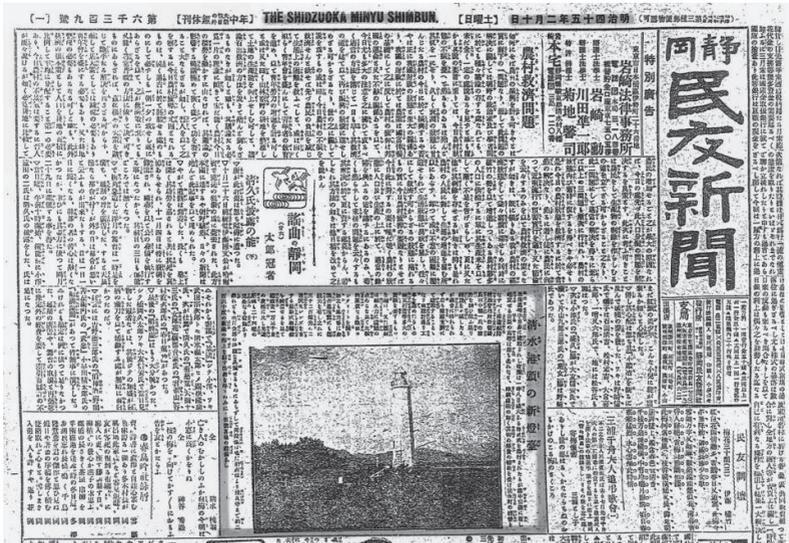
灯台の落成式と大祝賀会

○燈臺建設落成式概況

清水港ハ 益々土地ノ繁榮ニ伴ヒ 殊ニ縣下ノ輸出品タル製茶ハ 年ヲ追テ増加シ 其出入船舶モ又愈々頻繁トナレリ 然ルニ之等船舶ヲシテ 安全ニ港内ニ引

導スベキ一ノ標識ナク為メニ 縣民ハ勿論 一般船主ハ之方不便利ヲ感ジ 土地有志者ハ 熱心其建設ニ盡カシタルモ 未ダ俄ニ其運ニ至ラザリシガ 政府ニ於テモ 愈其必要ヲ認メ 四十四年五月之ガ起工ヲナシ 四十五年二月竣工ヲ遂ケタリ 茲ニ於テ清水町民ハ落成ノ式ヲ奉行スルノ事ニ 其式場ヲ燈臺構内ニ選ビ 二月八日午後二時 町助役ノ開會ノ辞ヲ以テ式ヲ開キ 燈臺建築主任山田技手ノ工事報告 土屋町長ノ式辞 松井知事ノ告示 航路標識管理所長代田中技手ノ祝辞代読 其他来賓ノ祝辞演說等アリ 終ツテ燈臺ニ点火シ 来賓ニ内部其他ヲ觀覽セシメ 午後三時ヨリ朝陽館ニ宴ヲ開キシカ 来賓ニハ知事以下縣高等官、阿部庵原両郡長 静岡市長並ニ隣接町村長 茶業商業兩會議所頭 貴衆兩院議員 縣會正副議長 參事會員 其他ノ名譽職員等約二百名ニシテ頗ル盛會ナリシト

この落成式と県知事ほか二百名の来賓が出席した大祝賀会の様子は、当時の静岡の地方紙である静岡民友新聞にも詳細記事が掲載され、当日は花火が打ち上げられていた事実も見られます。2日後の明治45年2月10日付の同紙(資料4)には、1面に異例の大きな写



資料-4 明治45年2月10日付 静岡民友新聞
(静岡県立中央図書館蔵)

真付きで清水水灯台が次のとおり紹介されています。

清水港頭の新燈臺

三保真崎^{まきざき}字出鼻^{でばな}に建設されし燈臺は 一昨八日盛大なる落成式を挙行されたるが 囿中富嶽に面し屹立せる白亜の高塔は即ち是なり、^{これ} 昨紙^あ處報の如く 其初め縣費の補助を受け 清水町の経営となすべく 横濱航路標識管理所新営掛長田中頼一氏の設計を請ひ 能^たふ限り経費を節減したるが 縣會に容れられず^後 國庫支辨にて建設すること、なり 前設計通り工事を進めたるもの 煉瓦石造等多大の費額を要するものを避け、又た鐵材は耐久力に遺憾の点あるを以て 比較的廉價なる鐵筋コンクリート^{てつこん}を採り 加之^{しか}も風力等に勿論 普通地震にも抵抗力を有し 之に三千二百燭^{しやう}光の二連閃光レンズを有する最新式回轉器を装置せるを以て 建設費一万三千圓の費額に比し 光達距離も二十四哩の完全なる燈臺なり

清水水灯台は、建設費の節約を理由に、他に比べ廉価な鉄筋コンクリート造を採用した意外な事実が明かされています。また、ここでも設計者は田中頼一氏であったと見られます。

そして、灯台点灯開始の3月1日当日にも、同紙は関連記事を掲載していますが、内容は次のような意外な記事です。

●三保燈臺観覧注意

二月中に竣成したる清水燈臺は、いよいよ諸般の設備整頓し、三月一日より公務執行の運びに至りしが、同燈臺は東海の名勝三保松林の海濱に建設せられしかば、随つて多数の縦覧者あるべし、左に航路標識管理所の



写真—4 点灯開始の頃の清水燈台
(燈光会所蔵大判写真)

燈臺縦覧規定を掲げ、一般の便に供せん

一燈臺の縦覧は午前十時より日没二時前迄とす

但時限内ただいまと雖も事務の都合により縦覧を許さざるべしとあるべし

二燈臺の縦覧を願ふ者は其旨掛官かかりかんに告げ許可を得べし

三縦覧の許可を得たる者は燈臺に備へある縦覧人名簿へ自ら宿所姓名を記すべし、但名刺を差出すも妨げなし

四縦覧人は掛官の許可なく又案内なくして燈臺内に立

入るべからず
五縦覧人は器械其他附属品等に手を触るべからず

六縦覧人は燈臺内に於て吸燃するを禁ず
七縦覧人は家畜、杖、傘、其他粗大の物を携へ又は木履等を穿ち燈臺内に入るを禁ず

八酩酊又は癡狂者と認むるときは縦覧を許さず
九伝染病流行中は縦覧を禁ずることあるべし

十縦覧人は縦覧中静肅にて諸事掛官の指揮に従ひ決して喧噪粗暴の挙動あるべからず

十一縦覧人不法粗暴の所為あるときは警察官に引渡すべし

清水灯台からの報告文書と推測されるこの記事には、日付は見られませんが、4月8日付の燈台公報に掲載されていることから、点灯開始すぐの3月下旬頃までに作成されたと見られます。清水灯台は、多数の灯台見学者が予想され、地域の人達を優先させたところ、落成式の2月8日から点灯開始の3月1日までの20日間に1850人が訪れたため、前記の静岡民友新聞の異例の記事が出されたと考えられます。予想通り3月下旬頃までの2カ月弱で、灯台見学者数は3640人に達しています。点灯開始の翌日から縦覧申込が莫大の数に上ったことから、静岡民友新聞の記事が、かえって大きな集客効果をもたらした可能性も考えられます。

この燈台公報の記事は、明治44年の各灯台見学者数一覧とともに掲載されています。灯台の見学者数は、毎年各灯台から横浜の本所へ報告され、燈台公報に「各所燈台縦覧人員数」と題して毎年一覧が掲載されています。清水灯台点灯開始前年の明治44年に最も多かったのは、9629人の犬吠埼灯台、続いて2843人の御前埼、2720人の野島埼、2691人の塩屋埼と続いています。2カ月弱で3640人も訪れた清水灯台が、いかに異常であったかが分かります。

そして、明治45年の各所燈台縦覧人員数は、大正2年4月4日付の燈台公報に掲載されています。清水灯台は24298人で2位の犬吠埼の7428人の3倍以上です。清水灯台は設置の年、日本一の破格の見学者が訪れた大人気の灯台でした。次頁の資料6の表は、清水灯台が点灯開始した以降、大正年間の見学者数が多い灯台を抜出したものです。大正期は終始犬吠埼灯台と1・2位を独占していたのです。各年の傾向や推移を見比べていくと、明治45年の清水灯台の24298人は、破格の数であったことが分かります。

この見学者に対応していた職員は、犬吠埼灯台の8名に対し、清水灯台はわずか2名でした。当時の灯台の職員数は、灯台の等級ごとに定められており、六等級の清水灯台の定員は2名で、大正期は職員が増えた記録も見られません。

最初の年の2万4千人もの見学者に対応した職員は、点灯開始の2ヶ月前から勤務していたことが、明治45年2月15日付の燈台公報の辞令記録から確認できます。同年1月17日付で江崎灯台長から転入した「種橋宗三郎」と、1月29日付の横浜水堤灯台からの「岩田亀作」の2名でした。

| | 明治45年 | | 大正2年 | | 大正3年 | | 大正4年 | | 大正5年 | |
|---|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|
| 1 | 清水 | 24,298 | 清水 | 11,136 | 犬吠埼 | 11,746 | 犬吠埼 | 12,049 | 犬吠埼 | 7,296 |
| 2 | 犬吠埼 | 7,428 | 犬吠埼 | 10,657 | 清水 | 7,335 | 清水 | 6,259 | 清水 | 3,934 |
| 3 | 特牛 | 4,365 | 出雲日御崎 | 5,213 | 御前埼 | 5,748 | 御前埼 | 4,078 | 御前埼 | 3,298 |
| 4 | 城ヶ島 | 3,168 | 野島埼 | 4,848 | 大角鼻 | 3,703 | 出雲日御崎 | 4,024 | 出雲日御崎 | 3,006 |
| 5 | 出雲日御崎 | 2,702 | 御前埼 | 4,190 | 城ヶ島 | 3,006 | 塩屋埼 | 2,512 | 野島埼 | 2,734 |
| 6 | 野島埼 | 2,262 | 城ヶ島 | 3,946 | 出雲日御崎 | 2,793 | 潮岬 | 2,414 | 美保関 | 2,617 |

| | 大正6年 | | 大正7年 | | 大正8年 | | 大正9年 | | 大正10年 | |
|---|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|
| 1 | 犬吠埼 | 16,315 | 清水 | 11,327 | 犬吠埼 | 18,262 | 犬吠埼 | 16,936 | 犬吠埼 | 19,196 |
| 2 | 清水 | 6,768 | 犬吠埼 | 10,091 | 清水 | 13,095 | 清水 | 16,411 | 清水 | 13,212 |
| 3 | 勝浦 | 6,767 | 塩屋埼 | 6,161 | 塩屋埼 | 6,227 | 塩屋埼 | 5,904 | 出雲日御崎 | 7,753 |
| 4 | 出雲日御崎 | 4,138 | 勝浦 | 4,404 | 出雲日御崎 | 5,423 | 城ヶ島 | 5,417 | 勝浦 | 7,701 |
| 5 | 御前埼 | 3,819 | 出雲日御崎 | 3,908 | 勝浦 | 4,501 | 出雲日御崎 | 5,007 | 城ヶ島 | 5,522 |
| 6 | 塩屋埼 | 3,307 | 御前埼 | 3,466 | 御前埼 | 4,318 | 御前埼 | 4,585 | 塩屋埼 | 4,925 |

| | 大正11年 | | 大正12年 | | 大正13年 | | 大正14年 | | 大正15年 | |
|---|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|
| 1 | 犬吠埼 | 19,265 | 犬吠埼 | 31,397 | 犬吠埼 | 32,612 | 犬吠埼 | 32,626 | 犬吠埼 | 38,757 |
| 2 | 清水 | 17,181 | 清水 | 16,271 | 清水 | 18,599 | 清水 | 18,585 | 清水 | 13,840 |
| 3 | 出雲日御崎 | 7,978 | 出雲日御崎 | 7,676 | 出雲日御崎 | 14,589 | 出雲日御崎 | 11,509 | 勝浦 | 12,079 |
| 4 | 勝浦 | 7,006 | 御前埼 | 7,612 | 勝浦 | 7,848 | 勝浦 | 6,761 | 出雲日御崎 | 11,423 |
| 5 | 塩屋埼 | 5,481 | 勝浦 | 7,491 | 御前埼 | 6,623 | 美保関 | 5,927 | 御前埼 | 10,504 |
| 6 | 御前埼 | 5,213 | 塩屋埼 | 5,924 | 塩屋埼 | 4,365 | 御前埼 | 5,847 | 塩屋埼 | 7,485 |

資料－6 灯台見学者数整理表（歴年の燈台縦覧人員数一覧より）



資料－7 岩田龜作肖像写真（燈光会蔵スクラップ帳より）

清水燈台の最初の職員
清水燈台初代補員の岩田龜作（資料7）は、岩田春風のペンネームで初期の燈光に数多くの記事を書いており、拙稿で何度も引用掲載しています。清水燈台の見学対応の様子も、大正4年9月号の同氏の記事「事業の紹介に就て」の中で、次のとおり見られます。

清水燈臺の如きは、學生であるとか或は地方人の研學旅行者等の団体来訪者多きより、余はこうした団体を構内に整列せしめて、必ず一場の事業上の講演を遣る、そして後、実物説明を為すのである。而かする時は混乱もせず整然と所定の行動に便するを實見した。

今は石川學士著「燈臺」（大正3年發行）であるとか、

航路標識一班であるとか便利なる武器が出来たが、以前其れこれなき時代に於ては誠に低級な説明程度であった。清水燈臺の開設當時であるが、静岡師範に於て校長以下三百五十名餘の縦覧申込があつて、是非相當の講演を遣らねばならず、早急石川技師へ項を別ちて質問をする、氏より懇切な回答を賜つたので、約四十分時講演を試み得た、又教員三四名の熱心なる筆記の栄光をも得て、欣快措く能わざるのであつた。

多くの見学者が訪れても、手を抜かず丁寧に灯台の説明を行つていた状況が見られます。このていねいな対応が、多くの見学者数を維持していた一因かもしれない。

このほか岩田氏の記事には、大勢の見学者目当ての茶店が灯台そばに八、九軒もあつた事実や、清水港に入港したドイツの軍艦の乗組員が大挙して訪れた時のエピソードなども見られます。

岩田氏の記事には、種橋灯台長を後年に回想した記事があります。大正7年4月号の「僕の戴いた看守長」には、次のとおり見られます。

種橋宗三郎氏は、清水燈臺の建築成ると江崎から、

僕は横濱から赴任しての同勤である。氏は明治二十四年頃、今の岡山医専校長の筒井博士等の尻押で、東京で独逸語學校を私営した事があつたと云ふ、それだけ世情に通じても居り又燈臺と云ふ公務にも可なり頭があつた方である。就中氏は、信仰も僕と一致して居つたので、萬事に好都合であつたのである。それに頗る座談に長じて居つて、四六時中話が切れない位であつた。氏は又社交の實に長じて居て、村人などの受けも頗る能く、體面も重んずる性質で、一燈臺の長としては立派な人物であつた。惜しむ事には慢性の心臟病者であつて、遂に大正二年の春、清水燈臺で永眠した。同所は風光殊に明媚の地である。氏が長き燈臺生活中公務に功績も多ひし、又徒輩の指導にも能く努力した一個の功臣である。實に高山樗牛博士と相對して千古の仙境に自然の勝景の懷に眠れるは蓋し至幸と云ふべく、實に天恵の然が、あらしめたのであらう。

清水灯台初代灯台長であつた種橋宗三郎は、大正2年5月11日に清水灯台で急逝し、後任は翌日付で岩田龜作が引き継いだ記録が、同年6月19日付の燈台公報に見られます。種橋灯台長の清水灯台での勤務は、わずか1年余りの短期間でした。歴年の燈台公報の辞令

種橋宗三郎 勤務灯台

| No. | 灯台名 | 発令年月日 | 在勤年数 | 役職 | 記録資料 |
|-----|-----------|------------|--------------|---------|----------------------|
| 1 | 江崎灯台 | 明治28年 | | 補員 | 逓信省職員録 |
| 2 | 男木島灯台 | 明治28年12月 | | 補員(初代) | 男木島灯台経歴簿 |
| 3 | 経ヶ岬灯台 | 明治31年11月1日 | 2年7ヶ月 | 補員(初代) | 経ヶ岬灯台経歴簿 灯台公報 第8号 |
| | | 明治33年7月23日 | | 首員(二代目) | |
| 4 | 横浜水堤灯台 | 明治34年5月23日 | 3週間 | | " 第18号 |
| 5 | 大瀬崎灯台 | " 年6月14日 | 1年10ヶ月 | 首員 | " |
| | 婦所(横浜) | 明治36年4月6日 | 1ヶ月 | | " 第34号 |
| 6 | 金華山灯台 | " 年5月6日 | 1年6ヶ月 | 首員 | " 第35号 |
| | 婦所(横浜) | 明治37年11月4日 | 4週間 | | " 第46号 |
| 7 | 横浜水堤灯台 | " 年12月1日 | 3ヶ月 | | " 第47号 |
| 8 | 野島崎灯台 | 明治38年2月24日 | 4年1ヶ月 | 首員 | " 第50号 |
| 9 | 火ノ山下潮流信号所 | 明治42年4月1日 | 2年 | 首員(初代) | " 第101号 |
| 10 | 江崎灯台 | 明治44年4月14日 | 9ヶ月 | 首員 | " 第129号 |
| 11 | 清水灯台 | 明治45年1月17日 | 1年4ヶ月 | 首員(初代) | " 第137号 |
| | 病没 | 大正2年5月11日 | * 戸籍上は同年5月5日 | | " 第11号 |

資料－8 種橋宗三郎 勤務灯台整理表

記録をまとめた資料8の表のとおり、種橋宗三郎は勤務3箇所目の経ヶ岬灯台から大型灯台の灯台長を歴任し、岩田氏の記事にある立派な灯台長であったことは明らかです。経験豊富で社交的で体面を重んじた種橋灯台長の判断により、清水灯台では異例の点灯開始前の地域住民の見学を実現させ、その年だけで2429人も押し寄せた前代未聞の見学者を、連日懸命に真摯に対応されていたことが容易に想像できます。その激務は、心臓病を患う身には、心身ともに大きな負担であり、彼の死を早めてしまったのかもしれない。

亡くなる4年前の種橋灯台長が写された家族写真を見今回初披露させていただきます。この写真は、種橋宗三郎とその家族の生涯をまとめた個人出版の回顧録に収められているものです。回顧録をまとめられた方は、種橋宗三郎のお孫様で、令和2年3月まで燈光歌壇の選者をなされていた桜沢つや子様です。回顧録によれば、種橋宗三郎は慶応3(1867)年3月に会津二本松藩の藩士の子として生を受け、戊辰戦争後の会津出身者には厳しい時代に、東京医学校、独逸学協会学校にて医学を修め、ドイツ語塾を経営するが、ドイツ留学の夢を捨てきれず、その資金調達のため給料の良かった灯台勤務を選んでいます。清水灯台で亡くな



写真—5 (明治42年撮影) 種橋灯台長家族
(桜沢つや子様提供)

られた時はまだ46歳で、15歳の長女から生後2カ月の二女まで四男二女が残され、その後家族は大変なご苦労をされ、激動の大正・昭和期を生き抜かれた秘録が綴られています。

種橋家一族の個人写真も多く含まれるこの回顧録の冊子には、資料8の愚生が作成した表が引用掲載され、そのお礼として出版した平成26年に、桜沢様から特別にお送りいただいておりました。

今回の拙稿作成にあたり、唯一種橋灯台長が写るこ

の写真を是非使用したく、書状にて桜沢様に掲載の許可をお願いしたところ、ご返事は桜沢様からではなく、ご息女の小野昌子様から掲載の快諾をいただきました。桜沢様が愚生の書状の直前の本年6月17日に亡くなられていたという訃報とともに。(桜沢様の訃報は燈光7月号に掲載されています)

桜沢つや様を偲び

愚生は桜沢様とは生前一度だけお会いしていました。平成20年4月に藤沢市で行われた灯台ファンが集う灯台フォーラム(第5回)に参加した時です。懇親会場で、愚生が灯台研究生であることを皆の前で紹介された後、立食のその会場で一人だけ椅子に座られていたご高齢のご婦人が声を掛けてきたのです。それが桜沢様でした。満面の笑みで「わたし、あなたの大ファンなの!」と皆の前で声を掛けられ、母程の女性からファンだと言われた初めての体験に、恥ずかしさ、うれしさとで強烈な印象で、鮮明にその場の光景を覚えていています。その時、自分が種橋宗三郎の孫であることを教えていただき、愚生は既に種橋氏と春風氏を燈光記事で存じ上げており、後日、資料8の表を作成してお送りし、その後何度か文を交わした後、桜沢様本

人がまとめられたこの回顧録の冊子をいただいておりました。

愚生は今回の書状を出した後、良い返事をいただければ、コロナ禍が収束後、直接お会いして、灯台フォーラムでの出来事が、自分の中に今も大きく息づいていること、愚生の秘めた思いをお伝えすることを漠然と考えていました。まさかの訃報に、それも叶わなくなり残念で仕方ありません。

灯台研究生にとって、桜沢様との出会いは、生涯忘れられない思い出となり、励みとなり、密かに心の支えにもなっていました。素敵な思い出を本当にありがとうございます。思い返せば、あの時からずっと、わたしも、あなたの大ファンだったのかもしれないですね。

桜沢つや子様（本名…桜沢艶子）のご生前のご厚情に深く感謝すると共に、燈光歌壇に於けるご功績を偲び心よりご冥福をお祈りいたします。

（明治の灯台の話71 清水灯台（前編））

2022年 尻屋崎灯台・入道崎灯台の参観について



尻屋崎灯台、入道崎灯台の参観業務は、**11月6日（日）**までとなっております。皆様のご訪問をお待ちしております！

燈光会尻屋崎支所 ☎ 0175-47-2889
燈光会入道崎支所 ☎ 090-1931-9706
燈光会事務局 ☎ 03-3501-1054

最新の参観状況につきましては、当会HPをご覧ください。

燈光会HP
QRコード



<https://www.tokokai.org>

関門海峡との出合(4)

部埼灯台(2)

美しい部埼灯台を守る会

普通会員 岩尾亮二



灯台等の航路標識の機能は、近年のAI、IT社会の進展のなかで大きく進み、同時に航路標識を管理する行政機関である海上保安庁灯台部の組織も進展して来た。本庁、本部の灯台部組織も名称が交通部となり第一線の全国に100を超えて所在した航路標識事務所は各海上保安部の組織として航行援助センターの名称の改革で、平成12年から16年にかけて5年計画で進められ、灯台等を管理する現場事務所は約半分の数になった記憶が残る。現在では航行援助センターも更に組織の改革が進み、訓令組織としての交通課として各保安部で航路標識業務を展開している。保安部への航行援助センターへの組織統合については初年度の平成12年度は5つの保安部で実行され、その1つは宮崎の油津海上保安部（現在は宮崎海上保安部）に組織整備が実行され、私は当保安部の初代航行援助センター所長として赴任した。保安部への組織統合については、この様に経験済みであり、私が所長として在籍した関

門航路標識事務所の門司海上保安部航行援助センター、若松海上保安部航行援助センターへの移行については、それほど不安感はなかった。

関門航路標識事務所が管理していた一部標識は、これまで航路標識業務を行っていなかった、若松海上保安部が所掌することなども当たり前の事項として作業を進めていた。関門航路標識事務所が所掌していた主たる標識を管理することになる門司海上保安部長からは逆に相談を受ける状況であった。当時の保安部長は私が第七管区海上保安本部灯台部監理課勤務時代に総合職系統の課長職を務められていた方で灯台部の規則や予算状況について、よく相談を受けたこともあり航行援助センターの業務についてはセンター所長に任せていただいた記憶が残る。また、保安部組織になってからは、センターとしても対外的な事案も大きく変わり海事関係の方々との係わりも増え、その一つとして「美しい部埼灯台を守る会」があると云ってもいいかもしれない。特に同会の創設者で初代会長の大迫秀八郎氏は、鹿児島県内の歴史的に伝統のある港町の近傍のご出身で、私が保安学校燈台科を卒業し初任の事務所である野間池ロラン航路標識事務所からは日常的に訪れていた地でもあり、部埼灯台の案件に関わ

らず沢山の機会にお会いする間柄となった。加えて同氏は門司区で貨物船の運航会社を経営しておられ、海洋の安全は勿論のこと経済分野において高い見識を持つておられた。

この「美しい部埼灯台を守る会」については平成28年に関門海峡海上交通センターの片野広之氏が「美しい部埼灯台を守る会」活動10周年と題し本誌に詳しく紹介されている。記憶が残されている方もおられると思う。片野広之氏にはあらためて感謝申し上げたい。

平成17年9月の海上保安新聞では（関門海峡）「美しい部埼灯台を守る会が発足」（さっそく敷地内を清掃）と題し大きく紙面を活用され「美しい部埼灯台を守る会」の母体であった「北九州市美しい海を守る会」の国土交通大臣表彰の授賞の紹介を含め掲載されている。「美しい部埼灯台を守る会」の発足作業は、初代会長の大迫秀八郎氏と私が関わる前に準備作業が進められ、大体の形が作られてから大迫秀八郎氏と私の作業となっており、この関門海峡との出合では私の関わりを中心に紹介させていただくこととしたい。

大迫秀八郎氏は世代的には私より先輩で、先に紹介した野間池口ラン航路標識事務所の前身が米国コーストガードの運用でもあったことから、地域での話題性

は多く、鹿児島県での勤務が通算17年もあった私にとっては、思い出も沢山あり話題は尽きなかった。そのような話の中で始まった「美しい部埼灯台を守る会」であった。そして平成20年に始まった燈光会の一一般会員制度に、同氏は平成21年に一般会員として入会されている。

私達職員の業務には、標識機能を保つため、無線機器等の専門職としての高度な知識技能に基づく作業は当たり前の中、標識機能を保つための草刈り、樹木の伐採は勿論のこと、海の安全標識としての姿を保つこと等、凜とした白亜の塔の標識機能も決して忘れることなく作業を進めながらこれまで先輩燈台守の作業ぶりを雑談の中で紹介しながら作業を進めて行った。

そのような職場意識の中で「美しい部埼灯台を守る会」がどのような活動を展開して行かれるのか戸惑いを感じながらも、新たな伝統文化に発展していくことを確信し、作業には職員一同で積極的に参加した。

清掃活動当日、作業着姿で集まれた会の皆さんの表情は明るく軽い足取りで燈台への道を登って行かれた。作業の進め方については話し合っておられたのか、最初から作業は本格的であった。通路の草を抜き取り、周辺は鎌で刈込、私達職員が汗をかいて行う作業を見

ておられたかの如く、スムーズに進められている。それも手馴れておられて。私達職員も本気になって作業を進めた記憶が強く残る。

この様に歴史を振り返って見ると、本誌に当時紹介しなければならぬ話題性であったのですが、私自身が大迫氏の考えに心酔していたのでしょう。20年以上を経過した今になって気付いている次第である。

大迫秀八郎翁はじめ、当時、私達の航行援助センター業務を支えてくださいました「美しい部埼灯台を守る会」の皆様方、関門海峡海上交通センターの職員の皆様方、第七管区海上保安本部交通部の皆様方に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。お礼と感謝の心を中心にして当時の活動について紹介させてもらいます。

発足して早々の第1回部埼灯台清掃には門司海上保安部航行援助センターとしても積極的に参加し、同センター初代所長として、作業の合間に美しい部埼灯台の歴史を紹介させてもらった。私も年を重ね記憶力も低下する中、詳細は覚えていないが作業が終了し、私のお礼の挨拶の続きであったと思われませんが、出席者一同で会員の指導の基に同会の歌「美しき部埼灯台」を皆で歌った覚えがある。

美しき部埼灯台 (二〇〇六 〇二二二)

詩：沖田 妙子 曲：藤本 秀明

一 緑が深き 丘に立つ

波に映りし 常夜灯

満珠千珠の 島照らす

海の安全 祈りつつ

あ、美しき 部埼灯台

二 時は流れて 今もなお

清虚の心 ひきついて

関門瀬戸の 荒波に

遠世に輝く その光り

あ、美しき 部埼灯台

三 登り降りの 石だたみ

未来に託す 夢岬

眼下にひろがる 周防灘

心に花を 咲かせよう

あ、美しき 部埼灯台

あ、美しき 部埼灯台

作詞された沖田さんは門司海上保安部航行援助センターが入っている合同庁舎の理髪店の経営者であり顔なじみの間柄であった。作曲された藤本さんは初対面

であった。素晴らしい詩と曲をおつくり頂いた沖田さん、藤本さんには心から感謝申し上げます。とても素直な旋律で、すぐにでも覚えて皆で歌うことが出来る「美しき部埼灯台」であったことが記憶として強く残る…… 歌の言葉には部埼の沖に広がる周防灘の景観が歌い込まれ「関門海峡との出合」(1)で紹介した「僧清虚」の名前も「僧清虚の心」も歌詞に出てくる。第1回部埼灯台清掃は平成17年8月であるから、歌は同年を遡り2月に作られている。残念であるが楽譜が手元資料に残っていない。本誌を読まれました燈光会会員の皆さんの中で楽譜をお持ちの方がおられましたら、本誌に紹介願えれば「美しい部埼灯台」の歌が部埼灯台と共に末永く永遠に唄いつながれ、美しい部埼灯台の伝統として残されていくことでしよう。

大迫会長は部埼灯台の歴史、そして「僧清虚顕彰会」の活動の歴史を十分に理解され、地域の伝統文化として100年以上にわたって伝承されている事も理解の上、準備を進め「美しい部埼灯台を守る会」をスタートされたことが見えて来る。「美しい」の言葉には、灯台の美しさは勿論のこと周防灘を含め岬全体の景観の美しさに加え「僧清虚」の理念の美しさ、更に関門海峡地域で生活を営まれておられる方々が「僧清虚」

の理念を地域の生活文化として受け止め100年以上にわたって顕彰して来ておられる地域文化、理念の素晴らしさを含めて「美しい」と表現されたのではと思う次第である。感謝の念は堪えない。

歌の3節目、一部をもう1度、振り返ってみてください。

未来に託す 夢岬

眼下にひろがる 周防灘

心に花を 咲かせよう

大迫会長の思いが織り込まれていると私には読み取れ、大きな声で歌った覚えが思い返される。更に私の勝手な思いであるが、明治維新時代に欧米列強との様々な外交の中で、思惑で進められた灯台の整備は、結果として国の将来の指針を示す輝きであったと記述された資料を読んだ記憶もあり、本年5月号の本誌に六連島灯台の紹介の稿で記述させていただいた。私の勝手な思いは強まるばかりであり「美しい」の意味合いにも含めたいものである。私達は「美しい部埼灯台を守る会」に業務を助けられ、加えて沢山の事を学ばせて頂いたことを退職し15年を経て気付かせていた

いている。
本当に灯台
の仕事を生
涯の生業に
させてもら
ったことに
感謝の念で
ある。

「美しい
部埼灯台を
守る会」の
清掃作業に
参加して活
動内容に促
されるよう
に私達職員
も周りの樹
木が気になるようになった。

部埼灯台は僧清虚立像のある海岸には岬を1周する
車道が整備され近くの海岸までは車で行けるが海岸か
ら灯台敷地までは自然石を使った階段もあり2000メ
ートル以上もある九十九折の木立が密生した山道を登

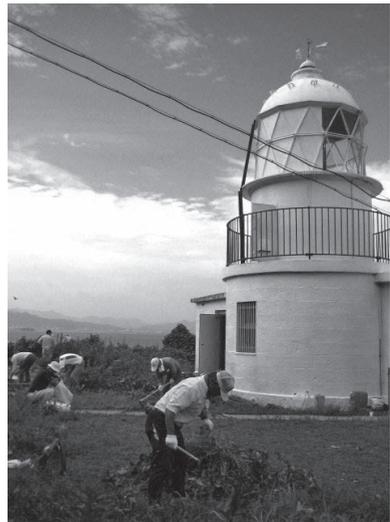


第1回美しい部埼灯台守る会の活動集合写真

って灯台監視、潮流信号所の機器が納まる昔の退息所
の建物に辿りつく建設時の面影を残す部埼灯台でもあ
る。

明治時代には通航信号所業務、潮流信号業務も始ま
り、広い敷地が各施設の為に石垣で階段状に広く開か
れ、どの様な作業になるか見当もつかない中での参加
であった。保安部としては灯塔の周辺、潮流信号所の
建物の周辺までの草刈りと考えていた。

第1回目の清掃活動を受け、灯台への山道の樹木も
気になるようになり、特に灯台本塔の敷地の一段下の
敷地周辺に自生している梅檀木の本灯火への視認障害
が気になり職員と相談し第2回目の清掃活動が予定さ



草刈り、除草の作業

れる前に切り倒すことにした。

私は小さい時から野山での遊びは得意であり、加えて先祖から相続した山林

の間伐等も高校生時代から学んでいたことから、大きい木を切り倒す経験、知識もあり、チェーンソーを使って特大の自前の木引鋸も持参し切り倒した記憶が残る。(第1回部埼灯台清掃作業の集合写真の左後方に映っている高い木です)

同年の12月に実施された第2回目の活動では切り倒した倒木が草刈りの邪魔であり枝を切り、主幹を短くして敷地の周辺に整理した覚えも残る。

私のこれまでの経験ではロラン局、デッカ局や大きな沿岸標識の灯台の管理においては専用道路があり、地域の方々が畑地の管理や海岸での作業に利用される状況もあった。地域の公道としての機能もあったわけ



部埼灯台、腕木式潮流信号機 通航信号所施設

である。

地元との絆は大切であり、安全に通れるように、見通しを良くするために草木を刈っていたことも思い出される。

「美しい部埼灯台を守る会」は逆に私達が実施すべきことを企画し実践していただいていた事であり、清掃活動には感謝、感謝の思いが残る。

そして、残念な厳しいニュースが届いた。昨年の本誌7月号で大迫秀八郎会長が旅立たれたとのことお知らせである。他界なさったのが令和3年2月との事でした。大迫秀八郎会長のご冥福を深くお祈り申し上げます。

「美しい部埼灯台を守る会」を引き継いでおられる方々の活躍で「美しい部埼灯台」の理念が関門海峡の地に生活文化として更に根付き広がり確信する今である。実は、この「美しい部埼灯台を守る会」を部埼灯台の二部として別に紹介する考えが浮かんで来たのは今年の初めであり、何となく「大迫秀八郎会長」から何時しか背中を押されていたのではないかと思いを深くする今である。「美しい部埼灯台を守る会」の「美しい」には景観の美しさを超えて地域文化、理念の素晴らしさを含めて表現されたと先に紹介させていただいたが、重要文化財、近代遺産への指定で地域を超えて

日本全国へ、更に世界への広がりの可能性を秘めて大迫秀八郎会長は思いを寄せておられたのかもしれない。

これまで部埼灯台に関わられた方々、「僧清虚顕彰会」「美しい部埼灯台を守る会」を中心に手持ち資料を2回にわたって紹介させていただいた。特に、「僧清虚顕彰会」の設立、時期については電話等で確認すれば簡明にお伝えできることは承知の上で回りくどい表現とさせていただいている。部埼灯台の150年以上にわたる歴史、種々の出来事が関門海峡の地域の行事、文化に根付き伝承されて行くことに軸足を置いて、その歴史を伝えたい思いで書き進ませていただいた結果であり、また、大迫秀八郎会長の思いを含め、全体的に私の勝手な思いを中心に綴らせていただいた事をお許しくださいます。また、部埼灯台の歴史を辿りながら現在の部埼灯台の姿を見ます時に「白亜の燈塔」その後方に関門海峡の早瀬瀬戸の潮流を電光表示板で表示している機器を納めた「元退息所」そして全面海岸には僧「清虚」の篝火を掲げた立像が立っている。私達はもつとその歴史を正面からとらえて紹介できる立場にあることを自覚したいものである。

追記

「美しい部埼灯台を守る会」の会長を大迫秀八郎会長で記述させていただきました。

私が退職し、頂きました写真等の電子資料では大迫秀次会長、佐藤修二副会長、広瀬吉俊副会長の名前も見受けられ、大迫秀八郎翁は途中で「美しい部埼灯台を守る会」の会長職を御親族の方に御継承されていたかもしれません。

私の把握不足であり、「大迫秀八郎会長」を「大迫秀八郎元会長」としてお読みいただきますようお願い申し上げますと共にお許しくださいます。

関門海峡との出合(5) 白洲灯台に続きます

組織的安全管理に関する外部講話
 ～元灯台課程第34期生に

講演いただきました！

二管区交通部では、6月27日に開催された管内交通課長等会議にあわせ、宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙科学研究所 長谷川克也 氏をお招きし、「プレイングマネージャーに対する組織的安全管理」と題した講演会を開催しました。

長谷川先生は、海上保安学校灯台課程第34期（昭和61年卒）を修了後、海上保安庁を退官し、医学博士、工学博士、経営学修士を修め、現在はJAXAに所属しながら、人材育成学会の理

事を務めるなど、幅広い分野で活躍しております。

今回、同氏を講

演者としてお招きしたのは、海上保安庁の航路標識業務を理解しつつ、

昨今の組織的な安全管理や若手人材育成について造詣が深いことから

（二管区交通部長の同期生としての縁もありですが！）、講演を依頼したところ、快く承諾いただき実現したものです。

航路標識事務所が海上保安部に統廃合され早数十年、灯台部から交通部への変遷を経て、保安部交通課は、航行安全、安全対策、航路標識と幅広い正面業務に取り組んでいます。

現場の海上保安官は、「高い技術力を持った技術集団」として、現場第一



講演会



JAXA長谷川先生

線の管理職（交通課長等）は、「熟練技術者」と「管理職」の2面性を有するプレイングマネージャーとしての働きが求められるようになってきました。

講演会では、海上保安庁特有のプレイングマネージャーが取るべき行動について、職員の安全管理や若手職員の人材育成なども織り交ぜながら講話して頂き、聴講者それぞれが自分自身の立場に置き換え、納得の表情を見せるなど、大変有意義な講演であったこと

が伺えました。

結びに、組織は、「若年技術者は熟練技術者の仕事の3倍以上の時間を必要とする。」ことを認識し、それを許容することで、初めて「将来的に活性化(成長)することが可能となる。」とのお話がありました。航路標識業務を担う次世代を育成するため、引き続き、当管区としても取り組んでまいります。(第二管区海上保安本部交通部企画課)

五 管 区

うんこで子供達が救える?? ママ海上保安官の願い

ピカピカの小学1年生の娘がいる大阪マーチスのママ海上保安官。毎日、担任教諭からのお便りで学校での子供の様子を知ることができます。

そのお便りに登下校での怪我が多いことを心配する担任教諭のつぶやきがありました。

夏休みを控えた子供達に海での事故を防ぐため、海の安全教室を提案、子供達の事故をなくしたいという担任教諭とママ海上保安官の熱い願いから『[※]うんこ海の安全ドリル』を使った安全教室の始まりです。

ドリルは全部で5問。1問終わるごとに『やったー』という大きな歓声が上がります。正解のご褒美としてうんこ缶バッチャうんこ指し棒など小道具を出すで大爆笑。お花のように可愛い

子供達の笑顔が咲きます。子供達にとって明るく楽しい記憶に残るような授業ができたのではないかと思います。これからも、機会を見つけて海保ファンを増やせる活動をしていきます! (*海上保安庁の仕事、海難防止を楽しく学んでいただくため、小学生の認知度が約90%の「うんこドリル」とコラボして海上保安庁が作製したものです)

(大阪湾海上交通センター)

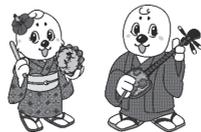


うんこ安全教室



みんなで記念撮影

一日海上保安官が
海の事故防止を呼びかけ
「事故ゼロを目指して」



海の日の7月18日、
奄美海上保安部長がA
NAからの人材交流で
4月に着任した奄美市
地域おこし協力隊の
「宮田夏弥（みやたな



委嘱の様様



海の事故防止の呼びかけの様様

つみ)さんへ「一日海上保安官」を
委嘱、一日海上保安官が奄美市の大浜
海浜公園で海水浴客などに海の事故防
止を呼びかけました。
美しい青い空と海と緑の大地、自然
豊かな奄美大島は、夏休みに入ると豊
かな自然を楽しむために島外から多く

の人々が訪れます。奄美海上保安部は、
島内外の多くの人々が豊かな海を安全
に安心して楽しめるように努めます。
委嘱と海の事故防止の呼びかけの様
様を新聞2社が取材、後日、広く報道
されました。

(奄美海上保安部)

第10弾

のほねる灯台 (16基) スタンプラリー達成者



全国北から南までの16灯台巡っていただき、誠にありがとうございました。
達成者の皆様、おめでとうございます！

第61号

赤木 理人 様(75歳) 東京都板橋区在住

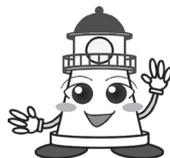
- ☆ スタンプラリー開始年月日
令和4年1月5日 残波岬灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日
令和4年6月23日 塩屋埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
残波岬灯台の職員に勧められて。
- ☆ 16か所巡った感想
沖縄で終わる予定が再度南から北へ
楽しみました。
御前崎と塩屋では以前の職員の方と再会
できまして感激しました。



第62号

末永 卓司 様(72歳) 東京都国分寺市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日
令和1年10月10日 出雲日御碕灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日
令和4年6月23日 平安名埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
旅のモチベーション。



第63号

仲川 伸治 様(63歳) 千葉県船橋市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和3年6月19日 観音埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年6月25日 残波岬支灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

四国最西端の佐田岬灯台見学で中に入れずに残念な思いをしたのが令和2年の10月でした。それまでは犬吠埼灯台と平安名埼灯台を見学したことがあって登れるのは当然と思っていました。インターネットで登れる灯台16基を知ってスタンプラリーを始めました。

- ☆ 16か所巡った感想

初日は観音埼、野島埼、犬吠埼の3灯台でスタンプをいただきました。一日で3灯台巡りは安乗埼、大王埼、潮岬の時に、残りは車、飛行機、夜行バスを利用して1か所ずつ巡りました。行く手段を考え灯台までの移動を楽しみ初めての景色に感動できたことは素敵な思い出です。

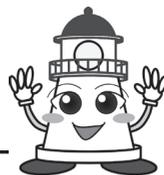
第64号

中嶋 輝夫 様(60代) 北海道札幌市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和2年6月7日 大王埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年6月30日 入道埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

全踏破を目指したい。

- ☆ 16か所達成した感想
- やりました。



第65号

しろ 様(50代) 埼玉県在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和3年6月27日 入道埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年7月2日 尻屋埼灯台

- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ

灯台に登れるとは思ってなく全国に16ヶ所ものぼれる灯台があるのを知ったので。

第66号

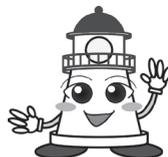
森田 哲彦 様・亜樹子 様(50代・ご夫婦) 兵庫県在住

☆ スタンプラリー開始年月日 令和1年7月28日 塩屋埼灯台

☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年7月2日 尻屋埼灯台

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
燈光会HPを見て。

☆ 16か所巡った感想
全か所夫婦で達成できてよかったです。



第67号

廣木 健司 様(55歳) 福島県会津若松市在住

☆ スタンプラリー開始年月日 令和1年6月23日 出雲日御碕灯台

☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年7月3日 潮岬灯台

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
灯台が好きだから。

☆ 16か所巡った感想
より好きになりました。



第68号

Chalu 様、CCBloom 様(40代・ご夫婦)
三重県四日市市在住

☆ スタンプラリー開始年月日 令和2年8月16日 安乗埼灯台

☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年7月4日 野島埼灯台

☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
コロナ禍で行く所がない時にたまたま行った安乗埼灯台で知ったので
挑戦しようと思いました。

☆ 16か所巡った感想
色々な灯台に行けて楽しかったですが、今は少し寂しいです。
とてもうれしいです!! ありがとうございます。

第69号

松田 直樹 様(60歳) 大阪府豊中市在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日
令和元年5月11日 犬吠埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日
令和4年7月22日 尻屋埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
灯台が大好き。
- ☆ 16か所達成した感想
灯台は日本の歴史であり美しい。



第70号

橋本 康德 様(59歳) 広島県在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和2年10月22日
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年7月26日 尻屋埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
たまたま犬吠埼灯台で出会ったから。
- ☆ 16か所達成した感想
おかげで、初島や宮古島とかいろいろと旅行目的が出来ました。

第71号

洲崎 靖 様(42歳) 広島県在住

- ☆ スタンプラリー開始年月日 令和4年5月23日 平安名埼灯台
- ☆ スタンプラリー達成年月日 令和4年7月26日 尻屋埼灯台
- ☆ スタンプラリーを始めたきっかけ
日本一周の一つの目標として。
- ☆ 16か所達成した感想
高低様々な灯台を楽しめました。

達成日数65日!
今年度最短です!

昭和三十一年九月二十五日
第三種郵便物認可
（隔月一回五日発行）

「燈光」

九月号
第六十七卷
第五号

